対談 日本心身医学会関連学会理事長に聞く②

日本歯科心身医学会の過去・現在・未来

下岡正八
（日本歯科心身医学会理事長／日本歯科大学新潟歯学部小児歯科学講座）

聞き手：坪井康次
（『心身医学』誌編集委員／東京大学医学部心身医学講座）

坪井 本日は、お忙しいところありがとうございます。

日本心身医学会は2009年に創立50周年を迎え、それを記念して心身医学関連5学会の合同大会を開催する予定になっております。心身医学関連学会が設立され、さまざまな場面で活躍されている状況を踏まえ、各学会の活動や将来的な取り組みなどを『心身医学』誌上で紹介し、相互にコミュニケーションを取り合っていったほうがよいのではないかと思っていて、理事長の先生方との対談を企画させていただき、今回、日本歯科心身医学会の現状と過去、そして今後の展望についてのお話をうかがいたいと思っております。よろしくお願いいたします。

日本歯科心身医学会の設立：心身医学会における歯科心身医学の広まりを経て

下岡 1959年に日本精神身体医学会（日本心身医学会の前身）が設立された頃、歯科心身医学に関しては個々の歯科医師による小グループの研究会活動が中心でしたが、同時に心身医学会において歯学系大学など教育機関からの症例報告や研究発表がなされたりしておりました。心身医学会総会で歯科関連のシンポジウムが開催されるうちに、少しずつ歯学系の会員数も演題数も増え、歯科関係の部門も学会内にできました。

坪井 心身医学会内での歯科心身医学の関心も高まっていましたね。

下岡 一方では、対象が歯科治療恐怖症、義歯不適応症、顎関節症など歯科疾患全般に及ぶことや、心理的背景をもつ歯科疾患の患者さんの訴えは歯科医師でなければ理解できない面が生じて明るみになってきました。そうした経緯から、1986年に顎口腔領域の心身医学を専攻する学会として、日本歯科心身医学会が設立されました。初代の内田安信理事長（東京医科大学口腔外科），2代目都温彦理事長（福岡大学医学部口腔外科），私で3代目になります。その年から毎年1回大会を開催し（Table 1）、会員数も現在歯科医師を中心に約570名になります。

歯科領域における心身医学：「診察」は一にして成らず

坪井 心身医学会での歯科心身医学の関心の高まりから日本歯科心身医学会が設立されたのですよね。歯科は身体診察科の一部門でもありましたが、歯科領域において心身医学はどのような
<table>
<thead>
<tr>
<th>回数</th>
<th>開催日</th>
<th>開催地</th>
<th>大会長</th>
<th>所 属</th>
<th>一般演題数</th>
<th>特別講演</th>
<th>教育講演</th>
<th>シンポジウム</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>第1回</td>
<td>1986年7月12日</td>
<td>東京</td>
<td>内田安信</td>
<td>東京医科歯科大学口腔外科学教室</td>
<td>27</td>
<td>0</td>
<td>1</td>
<td>0</td>
</tr>
<tr>
<td>第2回</td>
<td>1987年7月10～11日</td>
<td>東京</td>
<td>久野吉雄</td>
<td>日本歯科大学歯学部口腔外科学</td>
<td>35</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td>第3回</td>
<td>1988年7月1～2日</td>
<td>東京</td>
<td>杉浦正已</td>
<td>日本大学歯学部口腔診断科</td>
<td>36</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>第4回</td>
<td>1989年7月13～14日</td>
<td>横浜</td>
<td>瀬戸院一</td>
<td>養徳大学歯学部第1口腔外科学教室</td>
<td>35</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>0</td>
</tr>
<tr>
<td>第5回</td>
<td>1990年7月13～14日</td>
<td>福岡</td>
<td>都 温彦</td>
<td>福岡大学医学部歯科口腔外科学教室</td>
<td>43</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>第6回</td>
<td>1991年7月11～12日</td>
<td>東京</td>
<td>久保田康郎</td>
<td>東京医科歯科大学歯学部歯科麻酔学教室</td>
<td>36</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>0</td>
</tr>
<tr>
<td>第7回</td>
<td>1992年7月11～12日</td>
<td>愛知</td>
<td>黒須一夫</td>
<td>愛知学院大学歯学部小児歯科学教室</td>
<td>41</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>0</td>
</tr>
<tr>
<td>第8回</td>
<td>1993年8月26～28日</td>
<td>盛岡</td>
<td>石川富士郎</td>
<td>岩手医科大学歯学部歯科矯正学講座</td>
<td>36</td>
<td>2</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
</tr>
<tr>
<td>第9回</td>
<td>1994年7月18～20日</td>
<td>東京</td>
<td>小林雅文</td>
<td>日本大学歯学部葉理学教室</td>
<td>31</td>
<td>2</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
</tr>
<tr>
<td>第10回</td>
<td>1995年7月27～28日</td>
<td>名古屋</td>
<td>深谷昌彦</td>
<td>愛知学院大学歯学部口腔外科学第1講座</td>
<td>37</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>0</td>
</tr>
<tr>
<td>第11回</td>
<td>1996年7月25～26日</td>
<td>東京</td>
<td>藤 稔</td>
<td>東京医科歯科大学歯学部歯科補綴学第1講座</td>
<td>44</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>0</td>
</tr>
<tr>
<td>第12回</td>
<td>1997年7月25～26日</td>
<td>新潟</td>
<td>下関正二</td>
<td>日本歯科大学新潟生体歯学第1歯学部小児歯科学教室</td>
<td>39</td>
<td>1</td>
<td>0</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>第13回</td>
<td>1998年7月17～18日</td>
<td>盛岡</td>
<td>石橋寛二</td>
<td>岩手医科大学歯学部歯科補綴学第2講座</td>
<td>35</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>第14回</td>
<td>1999年7月17～18日</td>
<td>大阪</td>
<td>川本達雄</td>
<td>大阪歯科大学歯科矯正学教室</td>
<td>24</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>第15回</td>
<td>2000年7月14～15日</td>
<td>福岡</td>
<td>亀山忠光</td>
<td>久留米大学医学部歯科口腔外科</td>
<td>41</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>第16回</td>
<td>2001年7月7～8日</td>
<td>東京</td>
<td>工藤逸郎</td>
<td>日本大学歯学部口腔外科学教室</td>
<td>35</td>
<td>2</td>
<td>0</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>第17回</td>
<td>2002年7月5～6日</td>
<td>東京</td>
<td>扇内秀樹</td>
<td>東京女子医科大学医学部歯科口腔外科講座</td>
<td>35</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>第18回</td>
<td>2003年6月28～29日</td>
<td>東京</td>
<td>小林義典</td>
<td>日本医科歯科大学歯学部歯科口腔外科講座</td>
<td>34</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>第19回</td>
<td>2004年7月17～18日</td>
<td>東京</td>
<td>永井哲夫</td>
<td>慶應義塾大学医学部歯科口腔外科学講座</td>
<td>34</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>第20回</td>
<td>2005年7月16～17日</td>
<td>名古屋</td>
<td>上屋友幸</td>
<td>愛知学院大学歯学部小児歯科学教室</td>
<td>28</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>0</td>
</tr>
<tr>
<td>第21回</td>
<td>2006年7月15～16日</td>
<td>福岡</td>
<td>横田 誠</td>
<td>九州歯科大学歯学部歯科保存学講座</td>
<td>28</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>第22回</td>
<td>2007年3月17～18日</td>
<td>東京</td>
<td>田辺幸康</td>
<td>東京慈恵会医科大学歯科学教室</td>
<td>33</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td>第23回</td>
<td>2008年7月19～20日（予定）</td>
<td>東京</td>
<td>山根源之</td>
<td>東京医科歯科大学歯学部オールメディシン・歯科口腔外科学講座</td>
<td>28</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
</tr>
</tbody>
</table>

※第1回大会では「歯科衛生士セッション」「市民公開フォーラム」が行われ、今後も継続が検討されています。
位置づけだったのでしょうか。

下岡 まず、教育的な背景からお話させていただきますと、歯科医学教育が行われている教育機関は、医学部と併設されている歯学部、医学部内の口腔外科、歯学部単体で設置されている大学の3つに大きく分けられます。医学部と併設されている歯学部や医学部の口腔外科では医学部との交流や知識の共有もあり、心身医学に関して学ぶ機会がありますが、歯学部が単体で設置されている大学では医学教育との連携はまったくなく、そういった機会はほとんどございません。つまり、心身医学を知る機会のないまま歯科医師になります。このような教育背景や、歯科領域では治療や処置が特殊であることから、心身医学、「心身」という問題が必ずしも明確ではありませんでした。

坪井 そのような中で心身医学の必要性はどのように感じられたのでしょうか？

下岡 例えば、口腔内の症状で歯科を受診される患者さんでも、精神疾患をもっている患者さんや、背景に心理・社会的な問題を抱えている症例が口腔内で出てきている患者さんが多いようです。しかし、おそらく歯科では診察と検査を合体させて「診査」にしてしまったので、歯科診療の現場では診察室に入ると、「はい、いすに座って」「はい、口を開けて」と口腔内を診る診査から治療に直接移行してしまうのです。

ところが、歯科医師が治療として歯を削ると、もとの状態に戻せとおっしゃる患者さんが結構いらっしゃるのです。患者さんのこうした不満を聞いていくうちに、歯科には、「診察」という行為がなく、患者さんの全体像を診る習慣がないことに原因があるのではないかと思い始めました。

坪井 なるほど。「はい、座って、口を開けて」では、何も言えなくなってしまいます（笑）。どういう人なのかと推測できない。少し話を通じてから「口を開けて」と言わないと見えてこないでしょ

下岡 私が専門にしている小児歯科でも、お互いに診療室の隅っここのほうで困ってしまっているような子どもを叩いたり縛ったりして治療している時代がありました。お互いに子を診る仕事をするものは間違いないと考えると、また、受診した子どもに心理テストを行ったりしながら心理的なものも含めて診ていて、やはり診察という行為のないことが歯科の一番の欠点だろうと思う。まずは歯科領域に「診察」すなわち歯だけでなく患者さん全体を診る行為を取り入れよう取り組んでまいりました。四十数年戦ってきて、ようやく認識されつつあるように思います。

日本歯科心身医学会の活動：
一般性の獲得と専門性向上のために

坪井 歯の痛みや口腔疾患で悩む人を心理・社会的な側面からも「診る」とことの必要性を、「診察」から歯科領域に認識させようとしてこられたが、現在、日本歯科心身医学会はどのように活動をなさっているでしょうか。

下岡 現在の歯科領域では、教育面において、CBT（computer based testing）コアカリキュラム、歯科医師国家試験問題の出題基準、平成18年から始まった歯科の研修医制度ガイドラインのシラバスをみると、60以上の項目に心の問題、心理や心身医学的基礎・臨床の知識、技能が問
われています。このように、心身医学は大変重要な分野と認識され始めています。そこで、日本歯科心身医学会では、歯科領域における心身医学の標準化を企図して、『歯科心身医学』（医歯薬出版、2003年）を発刊いたしました。また、歯科の診療では、頸関節症、口臭症、舌痛症など歯科を受診する患者さんの2割は、心理社会的ストレスの関わりを疑って治療に当たらないと本当のQOLの改善を獲得できないともいわれています。こうした歯科心身医療に対するニーズに応えるため、そして歯科心身医学を研鑽した歯科医師の専門性を確保するために、2007年より認定医制度を施行しました。今後は所定の基準を満たした学会員については、認定委員会の管理のもと認定医・指導医の認定を行う予定です。

坪井　認定医制度は一つのモデルになりますし、目標にもなりますね。学会員への専門教育の面ではいかがでしょうか。

下岡　学会員への教育研修の一つとして、年2回学会誌『日本歯科心身医学会雑誌』を発行しております。掲載論文の傾向としては、頸関節症、舌痛症、口臭症に関する論文や、医師との協力のもとに治療が必要であった症例報告、基礎的実験の論文が近年増加傾向にあります。加えて、知識・技能の普及を目的とした研修会を2004年から定期的に開催しております。

しかし、心の問題をもつ患者さんに対する診療、すなわち、歯科疾患を訴える患者さんが心理・社会的背景をもつのか、精神疾患をもつ患者さんなのかを判別する教育はほとんど行われています。舌痛症、頸関節症などの患者さんはほとんどが最初に歯科を受診されるので、口腔内の治療が終わった後に心身症状や精神疾患有気ついて精神科の先生にお願いしておく、ついに精神科へ回せと言われてしまう（笑）。

もっと“コンサルテーション・リエゾン”を

坪井　診分け方のテクニックを身につけている必要があるということでしょう。いま歯科領域でも、患者さんとのコミュニケーションのための面接法をOSCEで評価するようになったり、模擬患者さんを使って実習されていますね。そうした教育が行われていくうちに、普通に接してよい患者さんなのか、あるいは少し心理的なものを抱えた患者さんなのか、もっと注意して診なければならない患者さんなのか、という診かたができるよう思います。

下岡　いま先生がおっしゃったようなことが理解できる歯科医師はまだ一握りなのです。「診察」のなかった歯科領域では、治療開始までのアプローチが学問として確立していない、やはり削って語める、被せる、抜く、入れ歯というのが20世紀の歯科のたどってきた道ですので、もう少し診分け方の知識をもっていれば、この患者さんは心療内科もしくは精神科の医師と相談しながら治療したほうがいいという判断ができるようになるのです。

坪井　心療内科でも口臭症や味覚異常の方が来られると、ある程度心理的なものと診断して治療いたしますが、やはり口腔外科や歯科の先生に診ていただいて、「異常がない」と確かめたり、実際に治療をしていただくほうがよい患者さんも結構いらっしゃいます。歯科恐怖症で口が開けられず歯の治療ができない患者さんに対しては、精神科、心療内科での薬物を使った治療というのが行われる必要もありますけれども、やはり口腔自体は口腔外科、歯科で治療しももらわないと治療にならないので。

下岡　ええ、そうなのです。

坪井　歯科医師、医師、心理士の先生などによるチーム医療を行って、治療法や医療費などについても皆で知識を出し合えるような医療ができるならば、患者さんも医療者にもメリットが
ある。そういう連携、コンサルテーション・リソソンができるようになっていくというのは今後の課題ですね。

日本歯科心身医学会の進むべき方向:
世界のリーダーを目指して

坪井 歯科領域における心身医学の現状や課題、学会としての活動についてお話いただきましたが、今後日本歯科心身医学会はどのような活動を展開されるのでしょうか。

下岡 歯科心身医学が歯科医学領域においても重要な分野であることは認識されてきていますが、今回（平成18年）の診療報酬改定では、これまで歯科医師も算定できていた「心身医学療法」が、心身症の診断ができる医師による診断を経た後でないと算定できなくなったように、まだ社会的にその必要性が浸透していない現実があります。われわれは歯科領域に心身医学をもっと浸透させるため、3つの方向性を打ち出しています。

まず、社会への影響力をもつこと。そのため、団体としての人格をもって影響力のある提言をしていくために、学会の法人資格の取得を進めております。

第2に、歯科診療における歯科心身医学の指針を示すこと。そのために、現在歯科心身医学診療ガイドラインの作成にとりかかりました。2007年に日本歯科医学会の認定分科会へ認められましたので、今後はガイドラインの作成を経て専門分科会への登録を目指します。

第3に、歯科心身医学を会員以外にも広く普及させること。今後は非会員の歯科医師、歯科衛生士をはじめとしたコ・デンタルスタッフを対象に研修会などを開催し、当学会の社会的認知度の向上を図っていきたいと思っております。

歯科心身医学に関連する学会や組織は世界でも大変に少ないのですが、当学会は、ゆっくりと世界のリーダーとして活動できることも目標にしています。

坪井 そうですね。歯科心身医学は日本から世界に向けて発信できる分野だと思いますので、今後の活躍に期待しています。本日はありがとうございました。

(2007年8月19日取録、於：日本大学文理学部百周年記念館)

Vol. 48 No. 3, 2008 | 心身医